



相對する

Cid

似非ファンタジーを召し上げれ

私は聳え立つ其れを眺めて居た。

「此処の中に探し物はある」と教えられたのは何時の事だろう。

遠くからは其れほど大きく等思えなかったが近づく程に大きく、近づく程に壮大に姿は造形や作り上げる影、威圧感にも似た存在を私に魅せ付けた。

私は眼前に聳え立つ壮大な建築物の前で一旦止まるも一呼吸置いて入口に向かい一歩、また一歩と歩みを進めた。入口と思われる扉には鍵穴らしい穴があいて居たが決して鍵は掛かって居無かった。否、鍵は掛かって居たのかも知れない、其れでも私は建物の中に入って居た。建物の中は明るく壁一面の白い壁紙が窓から入る光から反射して眩しいようにも見えた。温かく一所にずっと居たいとも思うも、

「探し物は何かしら？」優しい異性の声が響いた。

我に返り其処に居るだけでは探し物は見付らないと云い聞かせ、部屋と云う部屋を探した。小奇麗に装飾され塵1つ落ちて居ないように思えた、入る部屋、入る部屋は香の甘い香りや優しい香りが漂って居た窓辺に飾られる生花達は其処が桃源郷が如くキラキラと輝き微笑んでいるようにも思えた。ただただ私の探し物は無かったのだった。元来た道を引き返すと何やら騙された様にも思えたのだった、窓から光は失せ白かった壁紙は灰色へ、部屋部屋の様子がすっかり変わった事に違和感を覚えた私は入口へ戻る事が出来ないのだった。来た道は来た通りでは無く部屋も見た部屋等其処には無くただただ異質と違和感と不気味さだけが漂う部屋への扉が有るだけであった。何が起こって居るのか私に理解できず、理解できない事が私に恐怖を植え付けた。

「見付らなければ出れませんよ。」

酷く荒んだ細い声。先の優しい声の主の声を潰し此れ以上潰れないといった具合の音が聞こえた。部屋と部屋を繋ぐ道は暗闇に包まれ壁は人工の建物とは思えない程に自然の岩盤の様に角立ち、手探りで次へ進む頃には目の代わりに先に歩ませる為の両手は血だらけに成って居る事に気が付いた。一体探し物とは何なんだ。もう探し物等どうでも良いとすら思うと細い一本道に成って居た、目を見開くと遠くで光輝く入り口とも出口とも思える朧気な光がぼんやりと見えた私は藁にも縋る思いで其処を目指した。

「探し物は何かしら？」優しい異性の声が聞こえたと思うと、

其処は一番初めに入った部屋だった。両手を見ると怪我などして居無かった。そして、そう探し物は。

私は違う部屋の扉に手を掛けて居たので有った。

貴方と云う人はそう云う人なのかも知れません。

私と云う人はそう云う人なのかも知れません。